



第6回 全国パブリックアート・フォーラム札幌から

# パブリックアートを考える

—まち・ひと・こころ、豊かさを求めて—

パブリックアートとは、公共空間に設置された芸術作品という意味ですが、最近では、まちづくりのなかでアートの果たす役割に注目が集まり、この言葉も、単に公共空間にあるアート作品のことだけではなく、地域社会の創造や、地域の暮らしとのかかわり、さらにはまちそのものをアートに、といったように、パブリックアートが幅広く議論されるようになってきたように思います。

ここでは、パブリックアートにできることを考えようと、昨年10月14日に札幌で開催された「第6回全国パブリックアート・フォーラム札幌」のなかから、アートとまちづくりにかかわるお話をご紹介します。

パブリックアートとは何か、そしてまちづくりのなかで、アートが担えることはどんなことを考えるきっかけになればと考えています。

## まちの主人公は人間そのもの

私は芸術家ではなく、まちづくり屋ですが、もう30年も前に横浜市で「人間的なまち、個性的なまち、美しいまちを作りたい」と言い実践してきました。その当時は今とは時代が違い、中央官庁や民間企業の人から「人間的なまちよりも経済が優先だ」「まちを美しくするなんてけしからん」とまで言われてしまいました。自治体のなかの人々も同様です。それでも、そういう人たちとずいぶん議論をして、まちの真ん中を通る予定だった高速道路を地下にすることを実現しました。高速道路も必要なのですが、それだけが一番大切ではない。都市空間は人間的な空間であるべきで、人間がまちの主人公であることを示したいと思いました。そこで高速道路が通らなくなって公園になったところを、より人間のものとはっきりさせるために考えたのがアートでした。優れたアート作品は、

## 21世紀のキーワードは「アート」

パブリックアート・フォーラムの提唱者である田村明氏のメッセージです。



法政大学名誉教授

### 田村 明氏

● Tamura Akira

くどくど説明する必要はありません。それを見ると、なんとなく人間的な空間に感じられるでしょうし、またアートにふさわしい都市空間をつくる努力が必要だと感じさせるでしょう。その思いが、いつかは素晴らしいまち、自分たちのまちだと誇りになっていくと考えました。当時はアート作品を購入すること、ましてや野外に置くなどということは、とんでもないという時代でした。それでもうまく寄付を求めることができ、委員会を設置するなど、いろいろと

工夫をして、アート作品を置くことを実現することができました。それ以降、各地で急激に公共空間にアート作品を設置することが、流行り出したと言えると思います。

## パブリックアートは市民のもの

当時は予算もつかない時代でしたが、その後はバブル経済の影響もあ

り、急激にお金がつくようになりま  
した。また民間企業も、アートに関  
心を持つようになりました。これは  
大変結構なことですが、今度はあち  
こちに熟慮なくアート作品が置かれ  
すぎて、それがきちんと住民に楽し  
まれているか、あるいは本当に美し  
いまちになっているかどうか、疑問  
に思えるところも出てきました。作  
品を置いたために、周囲が自転車置  
き場になっていたり、ごみ集積場に  
なってしまうという光景も見られる  
ようになったのです。こんなことで  
はいけません。パブリックアートの  
価値を多くの皆さんが認めてくださ  
ったことはいいことですが、これか  
らは、それがまちを本当に美しくし  
ていくことができるかが問われてい  
ると思います。どんなアートを、ど  
ういう形で置けばいいのか。さらに  
アートをどのように管理していけば  
いいのか。アートを置いたまち並み  
をどう整えるのが課題です。パブ  
リックアートとカタカナを使うのは、  
従来日本では「公共」とは役所が造  
り管理するという意味が強かったの  
です。市民社会のパブリックとは市  
民が協力して美しくしていくもので、  
役所のものではありません。パブリ  
ックアートは、市民皆さんのもので  
す。市民の方もそれを認識して、ア  
ートを大切にしていくことが重要で  
す。その仕組みと心構えがないと、  
いくらお金をかけて立派なアート作  
品を設置しても、まったく意味があ  
りません。では、そのためにどうし  
たらいいのでしょうか。それをみな  
で考える時期にきているのだと思い  
ます。芸術家も、評論家も、行政も、  
企業も、制作者も、メンテナンスを  
する人も、そして市民も、みんな一  
緒になって考える必要があるのです。  
現在は、ひとところのように、どん  
どん予算がつく時代ではありませんが、

私が言い出した時代に比べれば、ア  
ートの必要性を多くの方が認めてい  
ます。当時に比べれば、ずっと状況  
はいいのです。しかし、それだけに、  
流行に乗るのではなく、よく考える  
ことが必要な時代になってきました。

これからは、みんなでどうやって  
アートをまちのなかに融合させて市  
民のものにしていくかを本当に考え  
ていかなければならないと思います。  
アートとは、芸術家だけのものでは  
ありません。これからは市民のア  
ートにしていくことが必要なのです。  
昔は例えば「彫刻を置く」という言  
葉を使っていました。しかし、今や  
「置く」のではなく、「まちをア  
ートする」ことも必要ではないかと思  
います。21世紀にはそういった展望  
が重要だと思えます。機能的で便利  
なまちだけではなく、より人間的な  
まち、楽しいまち、そして美しいま  
ちをつくるために、アートは非常に  
重要な役割を担っていると思えます。

## まちづくりは共同作品

まちはみんなでつくるものです。  
私は、まちづくりを市民の共同作品  
だと考えています。みんなで制作し  
た、楽しい、美しい、個性的なまち、  
それがみんなで作った共同作品であ  
り、その作品はそのまちにしかない  
ものです。そうすれば、全国画一的  
なまちには絶対ならないはずです。  
そこにしかできないまちを、みんな  
の力で作っていくためにも、これか  
らのアートの役割は非常に重要だと  
考えています。私は、21世紀のキー  
ワードの一つにアートがあると思っ  
ています。すぐに効用が現れるもの  
ではありませんが、何かそこにある  
ことによって意味を感じることがで  
きる、しかもそれはみんなが同じよ  
うに感じるのではなく、押し付けで

もない。人それぞれが感じ取れば  
いいのです。まちづくりは継続して  
いかなければ意味がありません。今  
日、明日でだめになってしまうので  
は困ります。長い目で見て考えてい  
くことが大切です。そのなかで、す  
ぐに効果が現れるわけではないので  
すが、広く市民に、じんわりと自分  
たちの地域という存在を感じさせる  
アートは有効ではないかと思えます。  
そうしたことから私は「まちづくり」  
の一つのポイントとしてパブリック  
アートを提唱しているのです。

北海道には、大変雄大な自然があ  
ります。それはアート以上のアート  
であり、個性です。パブリックア  
ートには一般論があるわけではあり  
ません。それぞれの地域で、地域に根  
ざしたものがあっていいと思います。  
心豊かな生活をしたと思う人たちが  
集まってまちをつくり、それが共  
同作品になる。まち全体が共同作品  
になるために、アートは重要なキー  
ワードになると思います。今までは  
効用・効率がキーワードでした。し  
かし、これからは効用だけの時代で  
はありません。北海道には北海道な  
りのパブリックアートがあつていい  
と思います。そしてパブリックア  
ートを通じていいまちとは何か、いい  
住み方とは何か、豊かに人間的に生  
きるためにはどうしたらいいか、多  
くの素材を持っている北海道で、ぜ  
ひそういったことを考える機会を作  
ってほしいと思います。

### PROFILE プロフィール

法政大学名誉教授

**田村 明** (たむら あきら)

法政大学名誉教授、都市プランナー。1926年東京生まれ。東  
京大学工学部建築学科、同法学部法律学科、同政治コース卒。  
運輸省、日本生命、環境開発センターを経て横浜市企画調整  
部長、同局長として市の戦略的事業（地下鉄、ベイブリッジ、  
都心部強化、MM21、港北ニュータウンなど）の企画・推進、  
横浜スタジアムの設立、総合的土地利用、アーバンデザイン  
業務の創立にあたる。パブリックアート・フォーラムの提唱  
者でもある。

## 基調講演 「まちと彫刻～イタリアからの報告」

北海道・美唄市出身で国際的に活躍中の彫刻家・安田侃氏は、大好評だったフィレンツェの野外彫刻展を予定より早く撤収して帰国され、このフォーラムに協力くださいました。

2000年にイタリア・フィレンツェ市で開催された野外彫刻展「街と彫刻」をご紹介いただきながら、「まちと彫刻～イタリアからの報告」と題して、基調講演をしていただきました。



彫刻家

### 安田 侃氏

● Yasuda Kan

#### PROFILE プロフィール

45年生まれ。東京藝術大学大学院彫刻科修士課程修了後、70年イタリア政府招聘留学生として渡伊。ローマ・アカデミア美術学校でベリクリ・ファッツイーニ教授に師事。以降、大理石の産地で知られるトスカーナ州のピエトラサンタにアトリエを構え、創作活動を続ける。91年ミラノにおける個展「彫刻の道」、94～95年ヨークシャー彫刻公園（イギリス）における個展「大理石とブロンズ」、95年ピエトラサンタにおける個展「野外彫刻展」等の大規模野外彫刻展で知られ、10年ほど前からは「アルテピアッツァ美唄」において彫刻作品と自然が一体となった独創的な環境づくりの試みを続けている。2000年には新千年紀に向けた特別企画としてフィレンツェ市内の主な広場や公園を舞台にした画期的な野外彫刻展「街と彫刻」が実現した。さらに、オーストラリア・シドニーにおける建築家レンツォ・ピアノ氏とのコラボレーションでも世界的に注目を集めている。

「この展覧会を成功させることによって、ルネッサンス以来500年、過去の世代が作り上げてきたものをただ守るだけになりつつあるフィレンツェの街に、21世紀につながる風穴を開けよう。伝統のなかに現代を、街に新たな出会いと美の息吹を入れる扉を開けよう。そのために<KAN>を呼ぶのだ」と大変な意気込みで困難な相手と交渉し、熾烈な戦いを続けた上で、現代彫刻家安田侃への依頼の打診があったわけです。

#### 多くの人たちに支えられて

その交渉相手は、まずフィレンツェ市。そして日本でいえば「文化庁」にあたる「文化芸術監督省」のトスカーナ州のトップ、彼は前文部大臣でウフツィ美術館長も兼務しています。それから、これは日本にないシステムですが、トータルに見たトスカーナ州のイメージを守っていくために公園や庭園・建物に関する権限をもつ「環境と建築に関する監督官」。フィレンツェの長い歴史上、初めてこの3つが合同で行う企画で、みんながゴーサインを出してくれた

間に安田侃の現代彫刻を置くという今回の大胆な企画に対して、フィレンツェはルネッサンス以来500年近く芸術の宝庫としてのプライドを持って生きてきた、“所有しているアートの量と質は世界一”を自負するまちですから、「何を今さら、安田侃という東洋人の現代彫刻を街なかに置く必要があるのだ」という拒絶反応も当初にはかなりあったのです。

しかし、今回の展覧会を企画したオルガナイザーは、現代彫刻の展覧会のなかで最高の企画・最高の展覧会との評価を得ている'72年の第1回のヘンリー・ムーア以来のフォルテ・デイ・ベルベデーレの彫刻展の企画者で、「その展覧会も実はマンネリになって来ていて、それに値する作家もいなくなってきた。21世紀を迎えるに当たって、マンネリを繰り返すよりも、新しい考えで彫刻展をやりたい」、「彫刻”や”作家”に興味のある、限られた人だけがチケットを買って彫刻作品を見る-そういうどここの美術館でもやっている展覧会の発想から抜け出して、“街に出る”と

### 歴史と芸術の都

#### フィレンツェで初の試み

世界的な観光地、歴史と芸術の都フィレンツェで、市内の主要な広場や公園等8カ所を会場にした野外彫刻展が開かれました。シニョーリア広場、ウフツィ広場、ピッティ宮、ボーポリ公園、駅前広場等ルネッサンス以来のまちの歴史・芸術と深くかかわる由緒ある場所を全て一人の彫刻家に任せる展覧会は今までなかった訳で、それを任されるのは大変な名誉であるとともに責任を痛感し、引き受けた後には強い緊張と少なからぬ不安がありました。

### 21世紀に賭ける

#### 企画者の意気込み

そのような侵すべからざる芸術空



ことによって実現した試みだったのです。

さらに、この展覧会を支える多くの人々がいました。30年前のムーアの彫刻展以来の設置を手がけてきた重機操作の名人、都市空間のなかに彫刻を置く際の調和や設置の可能性、基礎のあり方等をアドバイスする建築家、道路管理者、美観や安全性に関するマナーまでコントロールする警察、ポーポリ公園の館長さんといった熱意のある人々と、各設置場所ごとに1ヵ所ずつ時間をかけて議論し、時には衝突もしながら設置の検討を行い、アトリエのあるピエトラサンタとフィレンツェの間を往復しながら、観光客や市民の動きとぶつからない時間帯に一点ずつ設置していったわけです。どうしてもイメージに合う作品が間に合わなかったサンタクロチェ広場は、妥協することなく遅れて設置されました。

## 波紋を呼んだ

### 記者会見でのやりとり

このような経緯の後、展覧会のオープニングセレモニーの前日の記者会見で次のようなやりとりがあったのです。「この伝統あるルネッサンス芸術の宝庫、フィレンツェで、なぜ、東洋から来た彫刻家の現代彫刻をこんなに街じゅうに置かねばならないのか？」という記者たちの大勢を占める厳しい意見を代表したかのような素朴な質問に、前文部大臣、現トスカナ州芸術文化監督官のパオロッチ氏がこう答えたのです。「あなた方はジャーナリストですから頭が良いでしょう。ルネッサンスについても勉強して良く知っていますね。では、KANがシニョーリア広場に置いた川の流りに作られたような『意心帰』という石はわかりますか？」…

ジャーナリストは誰も答えません。——「この石はわかるためのものじゃない、勉強してもわからないのですよ。これは感じるものなのです。あなた方がよく知っているフィレンツェの美術は勉強すればわかるでしょうし、勉強してきた人には興味があるでしょう。でも、何も勉強していない人やちょっとフィレンツェに来た人、それに多くの子供たちにとって、フィレンツェの美術は、あなた方が思っているほどには興味はないのです。それに比べたら、このKANの石、ここにある『意心帰』という非常にシンプルな石は、多くの人が、特に感じることでできる人には深く感じてもらえるものなのです。これから迎える21世紀はそういう時代なのです。そのために、私は敢えて、KANのこの彫刻を、このシニョーリア広場の真中に置くように頼んだのです」…ジャーナリストたちはシーンと静まり返りました。震えるほど嬉しい瞬間でした。このような考えの人がトップとして責任を持って許可を出し、しっかりしたコンセプトをもって挑んでくれ、それを受けとめて多くの人たちが熱意を持って取り組み、支えてくれたからこそ今回の展覧会が実現できたのです。さすがに、伝統ある、歴史あるフィレンツェだと実感しました。

## 文化芸術監督官が

### 寄せてくれた高い評価

そのアントニオ・パオロッチさんが今回の展覧会のカタログに寄せてくれた素敵な文章がありますので抜粋してご紹介させていただきます。

「…安田の彫刻は、歴史的な街並みと謙虚に小さな声で対話している。それを理解するためには空っぽの頭と透明な心、そして長い時間じっく

り見つめることが必要だ。芸術家はフィレンツェの見事な碁盤の上に彫刻という駒を置くことで、静かな問答ゲームを提起しているかのようだ。美術史上、最も有名な彫刻ミケランジェロ、チェルリーニ、ドナテッロ、ジャン・ボローニャなどの作品の足元に置かれた石：『意心帰』を見る時、まるで何百年もの間磨かれてきた川の小石のような完成度の高さと完璧さに感嘆する。そしてこの彫刻が白く輝く神なる大理石を賛えるべくそこに置かれ、フィレンツェの街を見事に彩っているように感じるのだ。本質的な表現と純粋な形のなかに、ものに宿る魂を見出し、それに意味を与える能力こそが安田のアニズムだ。子供たちは大きな石をなで、恋人たちは大理石の額縁のなかで写真を撮る。これは良いしるしだ。なぜなら知と美のマエストロである安田侃の詩的な芸術を人々が理解したという証拠だからだ…」

## 感じた人たちの温かい反応が

### 新聞の論調を覆した

しかし、このような高い評価にもかかわらず、その翌日の新聞の論調は「議会はミケランジェロを屋根裏にしまい込んだ!」、「巨大なKANの大理石の彫刻によって街が占拠された!」などという抵抗感を滲ませたものでしたが、市庁舎：パラッツォ・ベッキオのなかの大広間で行われたオープニングセレモニーはルネッサンス音楽の演奏などもあって和やかな雰囲気で行われ、何とか彫刻展をスタートすることが出来ました。

「KANの作品の良いところは、見る人、触る人のその時の精神状態が、非常に素直に現れる…」 「この石：『意心帰』は地球の中心のしるし…」 「(ミケランジェロの) ダビデと同じ



シニョーリア広場に設置された『意心帰』で遊ぶ子供たち Photo by Danilo Cedrone



サンタクローチェ広場に設置された『真無』 Photo by Taku Yasuda



ピツティ宮内中庭『天秘』 Photo by Danilo Cedrone

●これらのほか駅前広場に『帰門』、ウフツィ広場に『天聖』『天泳』、ピツティ宮に『翔生』、ポーボリ公園に『無何有』『新生』『天秘』『妙夢』、ストロツィー広場に『天泉』が設置された。

石切り場から切り出した石を彫った『意心帰』、すごい!」「こんなものをフィレンツェに置けたなんて大変なことをやったものだ。フィレンツェも捨てたもんじゃない。革命だ!革命だ!…(隣に有名なサボナローラのモニュマンがある)」「彫刻が額縁になって、そのなかに入る人、彫刻に入る人が主役になれる…」「『天秘』の上にゴローンとひっくり返って寝ると空が抜けて見える…」「みんなその彫刻を誰が創ったかなど関係なく、石に腰かけて休んだり、通り抜けたり、写真を撮ったり、思い思いに楽しんでいる…」「敢えて作家性を排除して、石の形態・存在そのものを提示する。多様な感じ方、楽しみ方が許容される限りない優しさ…」「場の持つ特性、周辺環境と一体となって彫刻が新たな空間の関係性を生み出す…」「この玉は何ですか? ミケランジェロの魂です。魂って丸いんですか!?!…」「歴史的な街並みに置かれた彫刻は、見るためというより、ともに生きるための新しい場を創り出そうとしている…」

### 歴史的試みの証しが 永久に残ることに…

こうして、3カ月の会期中多くの市民や訪れた観光客は、これらの彫刻を自分なりに感じ、楽しみ、素直に受け入れてくれました。その結果、企画者たちは今回の「フィレンツェ展」の作品のなかから『天秘』3点の現代抽象彫刻を500年の歴史あるポーボリ公園に永久設置するという大きな決断を下してくれました。ポーボリ公園の館長は以下のように語ってくれました。

「このポーボリ公園の500年の歴史始まって以来、現代彫刻を置くのは、後にも先にもKANの作品だけ。歴史

ある公園にゆったりとした時を過ごせる異次元の瞑想空間を創れることを確信している…」

### 勇気と決断と責任

会期中だけの設置で、いずれ撤収される野外展ではなく、後々動かし難い永久設置の重み、釈明できない責任、監督官が自分の首をかけている。今回の展覧会で深く感銘を受けたのが、作家だけでなく展覧会を企画・オーガナイズする人たちの「勇気」と「決断」それと「責任」です。

展覧会の企画にゴーサインを出す際には必ずサインをします。何事をするにもサインが必要ですから大変なのですが、誰が責任を負うかがはっきりしているという意味ではやりやすいとも言えます。その点では、日本におけるパブリックアートに関して言いますと、システム的にトップの人たちが出てこないですね。顔が見えないのです。ヨーロッパの場合は、パブリックアートが生活のなかですごく大切な部分を占めるものとして、まちが企画する展覧会というものには、当然行政のトップが出てきて、許可のサインをして、「何かあったときには責任をとります」という点が非常に明確です。そういうことがない限り、なかなか、新しいことは出来ません。

それから、先ほどお話しした「芸術文化監督官」という制度も、トータルな意味で美的なまちを創っていく上で、日本においても絶対必要なシステムだと思います。トップに立つ人たちは、そういうまちづくりにおけるアートなどのソフトの部分に対して、きちんとサインして実施するといった、「勇気」と「決断」と「責任」を持ってまちづくりをしていただけだと思います。

# 分科会 報告

パブリック  
アートを  
さまざまな  
角度から議論する分科会の  
なかから、まちづくりや地域づ  
くり寄せた、参加者からのメ  
ッセージをご紹介します。

## 第1分科会

「まちづくりを考える」から  
**地域の暮らしとアート**  
パブリックアートからコミュニティアートへ

第1分科会では、公共空間におけるアートの役割を、暮らしと密接に関連したまちづくりの視点から見直す議論が展開されました。

## パブリックアートには 地域らしさを表現する役割が

● (株)CIS計画研究所代表取締役所長

濱田 暁生氏



江差町をはじめ、美幌市、下川町、真狩村など道内各市町村のまちづくり、景観計画、商店街活性化等を手がける。北海道地域づくりアドバイザー、同景観アドバイザーなども務める。

私は、まちづくりや地域での活動を支援し、コーディネートする立場で、いろいろな地域にかかわらせていただいています。江差のまちづくりとのかかわりのなかで、「江差追分」に関する施設を計画する際に地元の方が、最初に「江差らしい建物にしたい。追分の殿堂にふさわしい建物にしたい」とおっしゃったことを今でも覚えています。その時、地域がありたいと思う姿を求めて、地域の人たちと一緒に現場で作業していくのが本来のまちづくりのあり方なのではないかと思いました。現場に出かけて行って、地域の方々のお話を聞き、相談しながら進めていくことを通して、江差では地域の方が望んでいたものが形になっていきました。パブリックアートもある意味では地域の人々が望むものとして実現されていくべきでしょう。各地域にはいろいろな考え方の人が住んでいますが、量や大きさやお金の額などとは関係なく、それぞれの地域特有の価値があるはず。その価値観をしっかり持った方が地域にいらっしゃることが、これからのまちづくりの大きな可能性につながります。

まちづくりにおけるアートの公共性の側面から考えると、例えば個人の住宅や庭であってもその前の通りを歩く人にとっては公共的な価値を持っているように、私的なものであ

っても公共性を持つという視点でアーティストが自分の表現を考えることができるかどうか。あるいはそういう視点で建築物や周辺環境とのかかわりを維持していく責任や、社会に対して新しい価値観に基づいた働きかけをしようという積極的な意欲を持つことができるかどうか、問われると思います。

また、パブリックアートには芸術としての普遍的な表現とともに、地域の人々の日々の暮らしのなかで、その地域や環境にふさわしい存在として、「地域らしさ」を表現していく大きな役割があると思います。

まちづくりとアートのかかわりのなかで、人々がその「地域らしさ」を他人から与えられたものとするのではなく、自ら感じ、楽しみ、それを享受し、自分にとっての価値を育み、愛着を持って維持していくことが必要ではないでしょうか。

しかし、その「地域らしさ」の物差しは一律のものである必要はありません。地域ごとの価値観で、もう一度自分たちの足元を見直していくことを通して、新しい可能性も生まれてきます。まちづくりを行政の担当者や専門家・コンサルタント任せにしないためには、真の意味での市民参加を実現する仕組みとして、行政による情報公開の徹底とともに、多様な人々が意見を発表できる場を用意することや少数意見を汲み上げる手法等が必要ではないかと思っています。





## パブリックアートには 教育の要素もある

●株輪島本店社長

中室 勝郎氏



漆の復権を目指し、日本初の漆芸デザイン会社や、漆のインテリア・サロンを開設。漆文化財として明治の町屋の復元などを行う。

私は十数年前から1カ月に1枚ずつ輪島の風景を絵の先生に描いていただいていたので、「輪島百景」といって、最初は12枚の絵で済ませようと思っていたのですが、「来年の絵は?」と期待されるようになり、自分でまちを歩いて、美しい場所を発見する努力をしてきました。絵は120枚にもなりましたから、地域の美しいものを懸命に探してきたのだと思います。

そんな経験をしながら、ある時、一軒の町屋と出会いました。廃屋寸前の誰も住んでいない明治期の建物で、買う人を紹介してくれないかと言うのです。とにかくその廃屋に入ってみると、身の毛がよだつような思いをしました。もう輪島には残っていないと言われていた輪島の歴史がそこにはあったのです。

私の職業は漆器づくりですので、まちづくりとは無縁ですが、仕事柄、漆器のことや輪島塗について、特になぜ輪島に輪島塗があるかということや、その家に入ったときにその答えが見つかりました。輪島には輪島塗を作り出すに値する文化があったのです。今その文化は、どこにも見当たりませんが、その痕跡が廃屋のなかにありました。その後1年くらい悩んだ末、その建物を塗師の家として復元することにしました。その塗師屋の家は、

パブリックアートと同じような考え方が見られます。普通は前が仕事場で奥が住まいですが、そこは前が住まいで奥が仕事場なのです。住まいの部分は、毎日仕事に行く前に通るので、文化的な空間にしてあるので、パブリックアートにも同じような要素があると思います。それは、いかに人を育てるかということでもあり、皮膚で文化的感覚を身に付けていくことだと思います。そういう意味では、パブリックアートとは人をつくる教育であるように思います。

## 長期的な視点で、 根を育てることが重要

●穂別町政策調整課まちづくり推進参事

斉藤 征義氏



住民参加と生活文化のまちづくりとして「ほべつ銀河鉄道の里づくり」などの活動を実践。宮沢賢治学会員として詩集、研究論も多い。

穂別町の富内地区では、住民主導で、宮沢賢治の童話の世界をテーマにした銀河鉄道の里づくりという地域づくりを進めています。その経験では、地域の人たちがどこまでできるかが重要なことだと感じました。同時に、全国の人たちとネットワークを形成していくことも大切です。そうすることで地域が活性化されるというよりも、自分たちが活性化されるのです。

最近では地域振興の手法も、どこでも同じようなイベントをするのではなく、人材育成や住民参加に注目が集まり、ずいぶん様相が変わってきました。しかし行政としては、マニュアルがないと取り組めないジレンマがあります。文化・芸術面では、

教育委員会中心の、動員数がバロメーターになるような側面も多かったように思います。そういう点は行政が意識改革をしなければならないし、同時に地域住民も勉強して成熟度を高めていくように両輪で進めなければなりません。

穂別町では'91年に、中心街の通りにメタセコイアを植えました。これは非常に成長の早い樹木で、今は並木の根が歩道を押し上げてくるような状況です。沿道の商店街では根が店に入ってくるのではないかと、気が気ありません。でも10年前にこれに取り組んだのは商店街の人たちです。これは時間的な考え方を持っていなかったということです。イメージ性だけにとらわれてまちづくりをした。ですから時間的な視点を持って取り組むことも非常に重要です。

今までの地域づくりは、メタセコイアの例でいえば、立派な木をつくるのが目標でした。しかし、これからは立派な木をつくることより、立派な根をつくるのが重要ではないでしょうか。何十年か先に、まちづくりとは何か、アートとは何かと議論をするような人たちをつくっていくことが今求められていると思います。

## 作品にするのではなく、 その先に目標がある

●コミュニティFM三角山放送局代表

木原 くみこ氏



札幌テレビ放送(株)でラジオ制作ディレクターとして活躍。'91年に同社を退社し、'97(株)らむれずを設立。'98年にコミュニティFM三角山放送局開局。

三角山放送局は札幌市西区の地域限定放送局です。私は以前、民間放

送局に勤めていましたが、放送という仕事に疲れて10年前に会社を辞め、すぐに反応がわかるような空間でコンサートをしたいと思い、しばらくコンサートを手がけていました。アルテピアッツァ美唄や穂別の廃校になった学校でもコンサートをしました。そこで気付いたのは、今までは外と遮断された立派なホールやスタジオで音を作ることがコンサートや放送だと思い込んでいたことでした。アルテピアッツァでコンサートをすると、ピアノの音と一緒に風で葉がそよぐ音が聞こえて、とても心地がいいのです。ピアノの回りに寝転がって聞いている人もいれば、子供にお乳をあげながら聞いている人もいます。放送も同じように考えれば、ずいぶん違った存在に見えるようになったのです。砦のなかで放送するのではなくて、地域のなかで、日常生活のトーンで視聴者と話すことができるのではないかと思ったのです。そうしたら、一度捨てた放送をまたやりたいと思って放送局を設立しました。'92年から地域発信のコミュニティFMの放送ができるようになって、今では北海道で13、全国で137も三角山のような放送局があります。地域の情報を地域から発信していくことのニーズをひしひしと感じます。

以前、穂別の銀河鉄道の里であるイベントに参加したことがあるのですが、先生と一緒に子供たちが歌ったり、詩の朗読をして、自分たちが心から楽しんでいることを目の当たりにして、とてもいいなあと思いました。私が放送局を始めた動機は、場ができることで、地域に多くの友達ができるだろうと考えたことでした。簡単にいうと放送を「作品」にしたくなかった。放送をすることが終わりではなく、その先に目標があって、放送はあくまでも手段なので

す。アートにも同じことが言えるように思います。

## 第2分科会

### 「パブリックアートを考える」から 地域とアートの連携

第2分科会では、魅力ある地域社会の創造にとってアートがどのようにかかわっていくかを、さまざまな立場の方からご意見をいただきました。

### パブリックアートを 観光資源に育てる発想を

●札幌テレビ放送株取締役会長

伊坂 重孝氏



'88年に札幌テレビ放送(株)代表取締役社長に就任。イサム・ノグチのドキュメンタリー、ドラマなどを制作。'99年より現職。(財)イサム・ノグチ日本財団評議員。

私は、約40年間北海道でテレビ放送に携わっておりますが、「地域とアートの連携」という意味では、当社が主催した美術展があると思います。放送局主催の展覧会では、おそらく当社が一番多いでしょう。過去21年間に17回開催していますが、'98年は札幌にモエレ沼公園がオープンした年でもあり、これに合わせて、イサム・ノグチ展を開催しました。若い

人に向けて、スポットCMをたくさん打ったおかげか、最終日には8万3千人という非常にたくさんの方の入場者がありました。この展覧会と並行して、モエレ沼公園が着工10年目を迎えて、オープンしました。モエレ沼公園は、ディズニーランドを除く各地のテーマパークがほとんど失敗しているのに反して、真夏に大にざわいとなり、土日には近くの自治体からバスを借り切って押しかけてくるほどの盛況ぶりでした。3~4万人の人々で駐車場があふれたこともあり、その後も市民の人気は高まっております。

大通公園にブラック・スライド・マントラが設置されたのが'92年ですが、当社でイサム・ノグチのドキュメンタリーを放映するためにニューヨークのイサム・ノグチ財団まで取材に出かけて行って、それ以来イサム・ノグチをずっと追いかけて、ドラマも制作しました。当社の南側にはブラック・スライド・マントラが、北側には植物園の緑があります。ちょうどその間に当社の多目的ホール・スピカも完成しました。そのなかにはイサム・ノグチの大きなブロンズの作品もあります。

札幌は、将来、目玉になるものを観光資源として利用していくことが必要ではないかと思っています。北海道がこれから生きる道は観光しかないと言われていますが、私たちは観光資源というものをもっと積極的に考えていかなければなりません。観光素材として、モエレ沼公園やブラック・スライド・マントラという滑り台を観光の目玉にしてしまうような発想があってもいいと思います。大通公園で黒く光る滑り台は、世界に誇れるものです。パブリックアートを観光資源にするような発想があってもいいのではないかと思います。



## もっと公的な資金支援を

●ミュージアム・シティ・プロジェクト事務局長

宮本 初音氏



90年よりミュージアム・シティ・天神（現ミュージアム・シティ・プロジェクト）の実行委員会にボランティアで参加。ミュージアム・シティ・プロジェクト事務局専従スタッフを経て98年より現職。

私が事務局長を務めているミュージアム・シティ・プロジェクトは、'90年に福岡市、企業、アーティストの有志が組織した実行委員会で運営しており、2年に一度、街の中で現代美術の展覧会を実施することが主な事業です。この展覧会にかかわる収入は、現在、3千万円程度で、当初はすべて企業協賛で賄われていました。その後、自治体の補助金や助成金が増えています。それでも7割以上が企業協賛です。私は、このようなプロジェクトが企業協賛の資金を中心として賄われることは、健全ではないと考えています。福岡市や福岡県、文化庁などからも支援を受けている事業ですが、資金支援の面では公的な部分が非常に弱いといわざるを得ないと思います。

ところで、福岡でこうした取り組みが始まったのは、ちょうど市内に新しいビルが建ち始めたころで、福岡が味気ない街になってはいけないうのでアートを取り入れていこうという大きな動きがありました。福岡には、アーティストの発表の場があまりなかったこともあります。そうしたいろいろな人たちの思惑が一つになってミュージアム・シティ・プロジェクトがスタートしました。第1回は商業地区の天神を中心に行いましたが、'98年からは、博多にも作品を置いています。博多では、地元住民と作家が実際に顔を合わせて会話を

しながら作品を作っていく過程もあり、今までとは雰囲気が変わってきました。

我々はこの取り組みを実験の場と考えています。美術館はフルコースのあるレストランですが、ミュージアム・シティ・プロジェクトは何が出てくるかわからない屋台のような役割があるということです。我々は非営利団体ですが、今後は、地域の人と一緒に現代美術のアートセンター的な役割を担っていくのではないかと感じています。

## アートを選択できる自由

●彫刻家

森川 亮輔氏



木を専門にする彫刻家。'95年福岡県いわき市に移住し、'99年に弟子屈町に移住。弟子屈町・ホテル風曜日、旭岳温泉・湧駒荘、川湯エコミュージアムセンター等で個展開催。

私は大学を卒業してからいろいろな職を経験し、'79年東京神田で初個展を開催してから21年間、ずっと木の彫刻だけを続けてまいりました。私の作品は、木との対話のなかから自然に生まれて、そこから見る人によって変化することが特徴だと考えて、それにふさわしい場を求めて、'95年にいわき市に、そして'99年には弟子屈町に移住をし、制作活動を行っています。

弟子屈町に来たきっかけは、いくつかの市町村に自分の資料を送って、音威子府村と弟子屈町から「よかったら来い」という回答をいただいたからです。音威子府も非常に好意的でアカデミックなところでしたが、すでに移住されていた芸術家がお話を聞いているうちに、そこは荒らしてはいけない聖地のように感じ

たわけです。そこで逆にあまり基盤がない弟子屈の方がいいだろうと思い立って突然やってきました。弟子屈町の役場の方は大変好意的で、空き家探などいろいろと気遣ってくれました。役場の方には非常に感謝しています。

豊かな地域の創造という意味では、どの作品が好きか、どのようなスタイルの作品が好きかを選択できる自由があることが大切ではないかと思えます。北海道はとにかく広いのですから、その選択の自由を与えることができるように、パブリックアートというものを、もっと広く考えてもいいのではないかと思います。

## 地域の記憶・歴史の再現

●宮城教育大学助教授

新田 秀樹氏



宮城県美術館学芸員を経て92年より現職。大学、企業等の専門家による共同研究体「パブリック・アート研究プロジェクト」代表。

私はこれからのパブリックアートを議論していく上で、いくつかのキーワードを考えてみました。

まず一つは「記憶」あるいは「歴史」です。その地域の人々が刻み込んでいる「歴史」を再現してみせる、あるいは一種のメモリアルとして見せていくことが重要ではないかと思えます。例えば札幌のモエレ沼公園はごみ処理場だったという「地域の記憶」が埋め込まれています。モエレ沼公園は、どこまでが作品かわからない作品ですが、このようなあり方も、これからの社会と芸術の一方向ではないかとも考えています。

もう一つのキーワードは「インフラストラクチャーとしてのアート」

です。以前は、単に都市に彫刻を置くような発想でパブリックアートが始まりましたが、現在はそれを越えて、基盤になる部分に質の高いアートを置くことが必要とされているように思います。今、公共事業は批判の対象ですが、本当に良い公共事業とは何かを考えていかなければならないと思います。

もう一つは「パトロネージ」というキーワードです。芸術活動も公共事業も、スポンサーシップやメセナなしでは成り立たないものです。そこで重要になってくるのが目利きです。イサム・ノグチに対する伊坂会長の目、それにミケランジェロの芸術だってメディチ家やローマ教皇なしでは成り立たなかったでしょう。その目で「発見」される、あるいはそういう機会を与えて、優れたものを生んでいくことが非常に重要だと思います。日本では行政のなかにアートマネジメントを専門にする人が少なく、また人事異動ですぐに担当が変わってしまいます。それでは質は高まりません。展覧会の開催も、アーティストが直接交渉や調整をしなければならない現状です。アーティストのビジョンが明確に反映されることはいい点ですが、一方でそれを直接吸い上げてくれるシステムがないと、非常に大変です。今、求められていることはそうした課題をどうやってシステム化していくかということではないでしょうか。

公共的な芸術と、社会のかかわりを持ったプロジェクトは、単なる芸術家支援ではなく、長期的には地域振興のための投資だという概念を持っていなければいけません。短期ではなく、長期的に見て、それが一つの都市の魅力づくり、地域の特色づくりになっていくという視点を持って、マネジメントと資金の仕組み

をきちんとつくっていくことが大事ではないかと思います。

## 市場原理に振り回されない 地域づくり

●釧路公立大学教授・地域経済研究センター長

### 小磯 修二氏



北海道開発政策に携わり、'97年に「芸術文化による新しい北のまちづくりをめざして」をテーマにした研究会を主宰。'99年より現職、現在は地域政策の分野で実践的な研究活動を行う。

少し前まで国土計画や地域計画で「美しい」という言葉を使うことに気恥ずかしさがありました。しかし'98年の「21世紀の国土のグランドデザイン」では、芸術文化についてしっかり1章が設けられるようになりました。地域におけるアートを政策的に展開していくことは、これからという気がします。

19世紀にジョン・ラスキンというイギリスの美術評論家が出て、芸術経済論という研究に取り組んでいました。彼は、芸術家は黄金と同じだと言っています。芸術家は作られるものではなく、発見されるべきものであるという意味です。「レオナルド・ダ・ヴィンチは港湾労働者のなかにもいるのではないか」というのです。地域と芸術のかかわりでは、芸術家に能力を発揮させる機会をつくるのが、地域社会の大切な役割だと思います。

地域経済では市場メカニズムだけで全てが論理づけられるような議論が多いようです。しかし、大量消費地から離れた地域にとっては、市場原理とは別の地方の論理があるべきではないかと思っています。市場性だけではない、その土地にいかねば体験できない、そういう地方の

魅力がこれからの地域活動を考えていく上で重要になっていくのではないかと思います。例えばアメニティという言葉でいわれるような地域の魅力を地域の政策として自ら作り上げていくことが大切です。それにはアートの分野が大きな手がかりになるのではないかと考えています。さらにパブリックアートの「パブリック」の意味をしっかりと考えていくことが大切です。パブリックとはいわゆる「公」ですが、日本では「官」の仕事と置き換えているような風潮があります。パブリックとは「私・プライベート」に対するもので、社会の営みに対して私欲を廃したかわりであるはずで、官のみならず、企業も、住民も、NPOも、それぞれ共有していかなければならないものです。パブリックの意識を社会のなかで共有していくことが、生き生きとした地域社会をつくることになると思います。パブリックマインドに支えられてこそ、パブリックアートは地域のなかで輝いてくるのではないのでしょうか。

